

Notes

- 1) To John Peal Bishop [Late February or early March, 1922], *The Letters of F. Scott Fitzgerald* (Penguin Books, 1963), p. 353.
- 2) F. Scott Fitzgerald, *This Side of Paradise* (Scribners, 1948), p. 105. 以後のこの本からの引用は全てこの版のものである。
- 3) F. Scott Fitzgerald, *The Beautiful and Damned* (Scribners, 1950), p. 3. 以後のこの本からの引用は全てこの版のものであり、頁数のみを示しておく。
- 4) William Fahey, *F. Scott Fitzgerald and the American Dream* (Thomas Y. Crowell Company, 1973), p. 57.
- 5) William Goldhurst, *F. Scott Fitzgerald and His Contemporaries*, p. 103.
- 6) James. E. Miller, *F. Scott Fitzgerald: His Art and His Technique* (New York University Press, 1967), p. 63.
- 7) *Ibid*, p. 69.
- 8) Richard D. Lehan, *F. Scott Fitzgerald: The Man and His Works* (Forum House, 1979), p. 86.
- 9) Arthur Mizener, *The Far Side of Paradise* (Heinemann, 1969), p. 155.
- 10) *Ibid.*, p. 155.
- 11) Edmund Wilson, "F.Scott Fitzgerald," *F. Scott Fitzgerald* (Prentice-Hall, 1963) edited by Arther Mizener, pp. 84-85.
- 12) William Troy, "Scott Fitzgerald—The Authority of Failure," *F. Scott Fitzgerald* (Prentice-Hall, 1963) edited by Aurthur Mizener, p. 21.
- 13) F. Scott Fitzgerald, *The Bodley Head Fitzgerald Volume 5* (The Bodley Head, 1963), p. 289.
- 14) Robert Sklar, *F. Scott Fitzgerald: The Last Lascoön* (Oxford University Press, 1967), p. 94.

Anthony は貴族主義とは勇気や名誉や美やそういう種類のもの——我々が素晴らしいと考える特質が、無知や必要性という歪みのない、都合のよい環境の中で最もよく発達させられることを認めることにすぎないと述べている。この Anthony の考えとは全く逆に Fitzgerald の貴族主義の概念は Gatsby や Diver や Monroe Stahr に認められるように、まさに「無知や必要性の歪み」の存在する不都合な環境の中で最もよく発達させられるものなのである。『偉大なギャッツビー』の Gatsby は、自己の夢への絶対的な信仰のために、非人間的な社会の壁とぶつかり、『夜はやさし』の Diver はウォレン家 (the Warrens) の代表する社会の前に崩れたのだと云えるし、『最後の大君』(The Last Tycoon, 1941) の Monroe Stahr は、自己の理想とする映画製作を目指し、強靱な意志の力で苛酷な現実と斗い滅びていった。そして、その各々が、その斗い滅びていく過程において、Fitzgerald が考える理想的な、あるいは美的な姿を垣間見させてくれたのである。「Gloria と結婚していなかったら、何かを成し遂げたかも知れない」という Anthony の言葉はまさに自己憐憫の言葉に他ならない。短篇「金持ちの青年」(“The Rich Boy” (1926)) の中で主人公 Anson Hunter は「我々の人生は妥協に終り、人生は妥協として始まる」¹³⁾ (“Most of our lives end as a compromise—it was as compromise that his life began.”) と云っているが、これは大富豪の家に生れ「精神的に結婚した人間」であった Anthony にもあてはまる言葉であると思われる。彼には行動の意志が全く欠けているわけである。

結論すれば、作者がこの作品で Robert Sklar も述べているように「観念小説」を狙っていたことは確かなようである。¹⁴⁾ 混沌とした社会を一貫して虚無主義で生き抜く主人公を描けば、この作品にもそれなりの意味があったと思われる。しかし、その場合でも、その虚無主義の対象となるべきものと主人公との関わり、つまり対立する概念の存在が必要である。しかし、作者にその思想的基盤が欠けていたために、曖昧な作品となってしまったと考えられる。この結果、作者は『楽園のこちら側』から続いた教養小説的手法に行き詰りを感じ、『偉大なギャッツビー』以後は、主人公と、その対立するものとの衝突を中心に描き出すようになり、同時に、『偉大なギャッツビー』執筆前に Spengler の『西欧の没落』(The Decline of the West) を読み、その影響を受けたために、主人公の崩壊の過程と重ねて＜アメリカ国家の史的変遷の相＞を浮き上がらせることによって、作品の厚みを増すことができたといえよう。そこで、この『美しく呪われた人』は、多くの欠点を持っているにもかかわらず、作者の創作態度の転換をみるうえでは、少くとも意味があると思われる。

Wilson の批評から、作者 Fitzgerald が真面目な行為を嘲笑し、下層階級や中流階級の妥協の生活を冷笑し、社会の制度や理性の通用しない軍隊に無意味をみていることは、ある程度理解できる。又、Wilson のいうように、作品の中の世界全般が、目的、威厳を欠いたものであることも確かだろう。しかし、そういう世界の中での正気の道は逃避であるということはともかく、それが＜最も榮譽ある道＞であるという考えは首肯できない。なぜなら、この作品の主人公は、他の作品におけるヒーローの概念とは異っているからである。ここで見方を少し変えて、社会が野蛮で愚劣でない、もっと良い社会であったら、Anthony がその知性と感受性を果して十分に発揮できたかということ、やはり疑問である。Anthony には根本的に意志の力が欠けており、職業に対する責任も義務もなく、社会を改革しようという意志もなく、ただ社会との妥協の生活があるだけである。

William Troy の意見はこうである。

——この作品は、失敗の研究というよりは、失敗の雰囲気の研究である——
即ち、計るべき尺度となる価値が存在しないために何の道徳的決定もな
され¹²⁾ない世界の研究である。

Troy のこういう考え方は、Anthony の責任回避を容認する危険性がある。世界が、道徳的決定が計られうる価値を提供しないとしても、人はそういう決定の責任、義務を回避してよいとはいえない。そして、まさにこの点で Anthony は Fitzgerald の他の長篇のヒーローと全く異っている。他のヒーロー達も、Troy のいう計られうる価値の欠如した世界に生きながらも、自己の行為の責任を全て引き受けて滅びていくのである。残酷で愚劣な非人間的社会の厚い壁と衝突して崩壊していくところに、Fitzgerald の英雄主義^{ヒロイズム}あるいは貴族主義 (aristocracy) ——つまり、個人の富や身分とは関係のない精神的な卓越——の可能性があると見える。Anthony は作品の中で貴族主義についてこういっている。

“Why, of course. Aristocracy’s only an admission that certain traits which we call fine—courage and honor and beauty and all that sort of thing—can best be developed in a favorable environment, where you don’t have the warpings of ignorance and necessity.”
(p.407)

いたが、『夜はやさし』(*Tender Is the Night*, 1934)における主人公 Dick Diver の場合のように、主人公の崩壊の記録という構図は一応あるわけである。しかし、問題となるのはその崩壊の仕方である。Anthur Mizener は次のように批評している。

—『美しく呪われた人』には、野蛮で愚劣な世界に妥協することを拒否して、月並みの仕事を奪われ、自分のふさわしいと考える特別の仕事もできないほど強く自分の弱さを感じ取る敏感で知的な人間に主人公 Anthony⁹⁾ を仕立てようとするかなり一貫した作者の努力を認めることができる。

確かに作者は、外部世界を「野蛮で愚劣」な世界に設定しようとしてはいるが、その意図は、他の作品の場合ほど強くは感じられない。この「野蛮で愚劣」な世界は、作者にとっていわゆる〈悲劇を生む場〉であるのだが、この悲劇を生む場と人間の関係のあり方が問題である。Mizener は知性と感性に優る主人公が、この世界との適応、妥協を拒否することが、彼の精神的勝利であると考えているようである。しかし、Mizener は更に続けて「Anthony は敏感で知的な人間として説得力がなく、説得力のあるのは弱々しくよろめき、自己憐憫に満ちた彼の姿である¹⁰⁾」とも論じる。まさにこの意志薄弱な主人公の姿こそが、作品内で際立っている。ここに作者の素材の扱い方の不手際が認められる。

次に、作者の〈知的良心〉 Edmund Wilson の批評を検討してみたい。

—この作品のヒーローとヒロインは目的も方法も持たない人間である、—つまり彼らは、最初から最後まで無鉄砲な放蕩に身をまかせ、何ら真面目な行為をしない。だが彼らの気まぐれな行動にもかかわらず、Anthony と Gloria は作品の中で最も理にかなった人物という印象を受ける。彼らが社会のシステムと接する時はいつでも、そのシステムは、冷笑の的となる。軍隊、財政、仕事をみると、全く目的、威厳を欠いたものとしてさらけ出される。ここから我々は、このような文明の中では最も正気な、最も栄誉ある取るべき道は、組織化された社会から逃れ、瞬時の興奮のために生きることだという推論を引き出すことができる。¹¹⁾

この最後の言葉が、多くの批評家にとって問題となっている。Anthony は「勝利を治めた」といっているが、読者には皮肉な響きとして伝わるだけで、彼の失った青春、健康、精神は取り返しがつかない。William Goldhurst はこの結末の疑問について次のように述べている。

「——フィッツゼラルドの共感がどこにあるのかわからない。Anthony は自分自身に対する幻想にみちているのか、自分の勝利の観念にパセティックになっているのか。あるいは彼は、真に苦しみ勝利を治めたヒーロー⁵⁾なのか？」

Goldhurst の云うように、確かに、作者 Fitzgerald は結末の部分を曖昧は気持から書いていると考えられる。しかし、結末に至る過程を読み進めてきた読者には、Anthony が勝利を治めたとは、到底感じられない。もっとも、James E. Miller によれば、単行本として出版される前の雑誌版では、Anthony の freshness, loyalty, ingenuousness, perfection が強調されていたのを作者が書き改めた⁶⁾ということだから、作者の共感の度が薄れて、多少はよくなっているといえるだろう。

ここで『美しく呪われた人』に関する主要な批評を検討してみたい。まず James E. Miller は、この作品に二つのテーマ——「青春の反抗」と「人生の無意味」⁷⁾が存在するが、人生を無意味とすることで反抗の姿勢も弱まっていると考え、Richard D. Lehan は Miller のあげた二つのテーマは決して強いものではなく、遺産相続後の生活設計を考えている主人公にとって「人生は無意味」なものではなく、この小説は「青春と青春の浪費」についての物語だと主張している⁸⁾。筆者には『楽園のこちら側』の延長として Miller のあげた二つのテーマを作者が意図した節はあるように思われる。しかし、「反抗」といってもその対象が極めて不明確であり、それが旧世代の価値観に対するものであるならば、祖父に対する反抗も描かれねばならないし、軍隊に対する態度も曖昧なままに終わっている。「人生の無意味」という言葉自体は作中に何度も使われているが、その人生への関わりが稀薄なのがここでは問題となる。又、Lehan のいう「青春の浪費」という点については、作者の他の作品の場合には、主人公と対立する社会との関係が、もっと強いために、「青春の浪費」という要素が読者に訴える力は、この作品とは質的に違っている。そこで、その原因を探る必要があると思われる。

既述したように、作者は「全体的構図」に注意を払わなかったと自ら書いて

Anthony は今や完全な崩壊の途上にあり、亡霊のような姿になり、肉体的な衰えと同時に精神的にも狂気に近づき、家庭内では全く無感覚になり、数時間もイスに座り続け外では些細なことでケンカを始めるといふ暴力的な姿を示すようになる。暴力が暴力を生み、遂にはニューヨークのアパートを訪れた Dorothy に椅子を投げつけて追い払い、彼の目には狂気があったと描かれる。

“I’ll kill you!” he was muttering in short, broken gasps. “I’ll kill you!” He seemed to bite at the word as though to force it into materialization. Alarmed at last she made no further movement forward, but meeting his frantic eyes took a step back toward the door. Anthony began to race here and there on his side of the room, still giving out his single cursing cry. Then he found what he had been seeking—a stiff oaken chair that stood beside the table. Uttering a hash, broken shout, he seized it, swung it above his head and let it go with all his raging strength straight at the white, brightened face across the room…… (p.446)

そして、その直後、彼は幼児期への退行現象を示し、少年時代の楽しみであった切手集めに夢中になる姿が描かれ、この退行と同時に遺産として3000万ドルが彼の手にはいったことが知らされ、作者が epigraph としてつけた “The victor belongs to the spoils.” の通りになる。

作者 Fitzgerald は最後に、欧州へ船旅にでる Anthony に「苦しい旅だったが、私はあきらめずに斗い抜いたのだ」といわせている。

Only a few months before people had been urging him to give in, to submit to mediocrity, to go to work. But he had known that he was justified in his way of life—and he had stuck it out staunchly. Why, the very friends who had been most unkind had come to respect him……

Great tears stood in his eyes, and his voice was tremulous as he whispered to himself.

“I showed him,” he was saying. “It was a hard fight, but I didn’t give up and I came through!” (p.449)

産相続を止められる原因となる。以後の二人の生活は、タバコの臭いに満ちた無秩序なものとなっていく。

この単調な生活のくり返しは、非人間的な外的力である戦争によって破られることになる。軍隊に入隊した Anthony の駐屯地南部は次のように描かれている。

In a town the streets were in a sleepy dream again, and together Anthony and Dot idled in their own tracks of the previous autumn until he began to feel a drowsy attachment for this South—a South, it seemed, more of Algiers than of Italy, with faded aspirations pointing back over innumerable generations to some warm, primitive Nirvana, without hope or care. (p.337)

「無数の世代を溯った、希望もめんどろもない、暖く原始的は Nirvana につながる aspiration をもった」土地であり、彼にとって精神の故郷なのである。「思考と時間の休止」(“lull of thought and time”(p.321)) の状態を好み、特別に何も考える必要がなく、何の意味もない会話の続く土地は、彼にとって逃避の場として最適の場所となる。自己の精神の統御力を失っている Anthony は、この地で出会う Dorothy という女性の受動性 (passivity) を Gloria の強さと正反対のものとして、「精神的に控えめな態度、全ゆるものを受動的に容れる力」と誤解する。

……yet he thought he detected in her some quality of spiritual reticence, of strength drawn from her passive acceptance of all things. In this he was mistaken. (p.326)

Dorothy は restless であるために Anthony を求め、Anthony もまた restless で、人生からの逃避のために Dorothy に接近している。つまり、自分自身ではどうしようもない<時間の流れ>から逃避と休息を求めているのである。この時点では彼は「明確な判断の不可能な人間」(“inability to make definite judgement” (p.325)) となっておりただ倦怠の波がおし寄せるだけである。William Fahey の批評では Anthony はいわゆる「紳士」としての段階から、Dorothy に近い位置にまで陥落したことになり、⁴⁾ こうして Anthony の軍隊生活も幻滅のうちに終ることになる。

いるが、祖父の遺産目当てにヨーロッパ旅行から帰り、ニューヨークで暮している所からこの作品は始まる。彼は仕事への義務感をもたず、「無意味な世界の中で無意味な人物として生きていく」(“I shall go on shining as a brilliantly meaningless figure in a meaningless world.” (p.23)) と公言する徹底してシニカルな Moury Noble と「野心的かつ円満なエネルギーをもった」(“ambitious, well-directed energy” (p.21)) 理想主義者の小説家 Richard Caramel という二人の知的な友人と、文学や人生について語り合いながら都市生活を送っている。Anthony はニューヨークの町は“clamour”に満ちた混乱した「迷路のような海」で、従って人生とはカオスであり<カオスの脅威>は<人生の脅威>であり、人生からの逃避はカオスからの安全を意味すると考える。このように Anthony は Amory と違って<行動する人間>とは成り得ず、<受動性の人間>となり、妻の Gloria の中に安らぎを求めて結婚している。確かに『楽園のこちら側』の Amory も<カオスの人生>に恐怖してはいるが、Anthony のように<カオスこそ人生>だと容認してしまうことはなかった。Amory には混沌の中にも自己の正体を握もうとする意志があったのである。

Gloria との結婚生活の中で、二人はお互いの欠点を、つまり Anthony は coward であり、Gloria は careless であることを知るようになる。Gloria は『偉大なギャツビー』(*The Great Gatsby*, (1925)) の Jordan Baker のように無鉄砲な不注意なドライバーとして描かれ、目的のない動きが強調されている。しかし、同時に彼女には、自分の生きる原理に専心没頭できる特質もある。もっとも、無責任な行動への専心は、Gatsby の場合と違って“great”なものに昇化されることはないが。ただ彼女は自己の生き方に忠実なために自己を失う女性にはならないのだ。一方の Anthony は、意志の強さに欠け、何ものにも自己を commit することができず、夫としての威信を示そうとしても暴力に訴えるだけである。彼も時には何かを秩序立てたり、何かなすべきことがないかと考えることがないわけではないが、長続きしない。妻の Gloria は Anthony が彼なりに真剣に怠惰に徹している、つまり、する価値のあるものが存在しないために何もしないのならば責めるつもりはないといっている。こうして彼らは、誰にも責められずにぜい沢な生活を送るのだが、二人の<人生と美と青春>の浪費は、時間の経過と同時に彼らが依存している母親の遺産の減少と平行して進行する。金の減少と共に、彼らの生活は無活動とカオスへの恐怖にとりつかれ、人生の営みから逃避するために、乱痴気騒ぎを行う。この騒ぎが祖父 Adam Patch の突然の訪問によって破られ、これが延いては遺

生きて行くための code, 彼の最初の哲学」 (“his first philosophy, a code to live by” (p.17)) を考え出す。彼は「精神的に結婚した人間」 (“spiritually married man” (p.272)) と「精神的に結婚していない人間」 (“spiritually unmarried man”) とを区別し, 前者を, 社会の既成のシステムと妥協し, 受動的に社会内の安定した価値体系を堅持する人間と規定し, 後者を, 挫折をくり返しながらも再起し, 前進し続ける人間, つまり社会内で絶えず自己の新しい価値体系を求める「進歩の一部」 (“a part of progress” (p.272)) である人間と規定する。そして最後には, 「人間に対応し, 支配する新しいシステム」 (“new system that will control or counteract human nature” (p.272)) を求める人間への強いあこがれを抱いている。

このように作品においては, 大戦前後の混沌とした時代——若者の自由の拡大, フロイト学説, 戦後の幻滅感などによって旧世代の「お上品な伝統」 (Genteel Tradition) への不信感が生れ, かといって新しい価値観も発見できない不安な時代——に何かを求めようとして, 社会主義に興味を示したり, 伝統に反抗したりする一青年の既成の社会への挑戦の姿勢が迫力をもって描きだされている。そこでこの作品の価値は, 新しい世代の若者の描写の新鮮さにあったと同時に, この作品が肯定する人間精神の可能性, つまり「全ゆる神は死に, 全ゆる闘いが行われ, 人間の全ゆる信仰が揺らぐのを見た」 (“find all Gods dead, all wars fought, all faith in man shaken” (p.282)) 世代の青年の一種ヒロイックな戦いの可能性を探った点にあったといえよう。

『美しく呪われた人』は三部より成り, 主人公 Anthony Patch の25才から33才までの生活が中心に描かれている。最初の一頁における Anthony の描写には, Amory が目指した「精神的に結婚していない」 “dynamic” な若者の姿が認められ, 『楽園のこちら側』の続篇という感じを受ける。

……a distinct and dynamic personality, opinionated, contemptuous, functioning from within outward—a man who was aware that there could be no honor and yet had honor, who knew the sophistry of courage and yet was brave.³⁾

しかし, 大富豪を祖父にもつ Anthony にはおよそふさわしくない描写であり, すぐにこういう描写は消え去ってしまう。彼はわずか11才で両親を亡くした為に, 絶えず「死の恐怖」 (“a horror of death” (p.6)) におびえ, 生きることは「死との戦い」であると考えに至る。父親の死後は, 成り上りの大富豪で, 老境に入って道徳改革論者となった祖父 Adam Patch の下で養育され幾分ナルシスティックな金持の青年に成長し, 自由気儘な青春を謳歌して

『美しく呪われた人』の批評について

馬 場 弘 利

F. Scott Fitzgerald の二作目の長篇『美しく呪われた人』 (*The Beautiful and Damned*, 1922) を考察するために、この小論では、まず処女作『楽園のこちら側』 (*This Side of Paradise*, 1919) との関係を考え、次に『美しく呪われた人』に含まれる諸要素を論じ、最後にこの作品に対する諸批評家の見解を検討し、作者の他の作品との比較を試みてみたい。

『美しく呪われた人』は『楽園のこちら側』に次いで1922年3月に単行本として出版され、作品の売れ行きは良かったが、批評は芳しくなく、大方は作者の長篇小説の中で最底のものと評している。作者は友人 J. P. Bishop に宛てた書簡の中で、この作品に関して次のように書いている。

「…私は全ての書評が概括的にすぎると思います。私自身はこの作品の全体的構図よりは、細々とした点にはるかに多くの注意を注ぎましたから詳細にわたる書評をいただきたいのです。」¹⁾

スクリブナー社版で450ページもあるこの作品において、この「全体的構図」の欠如は当然致命的な作品の欠陥となることは明らかなことであるが、「細部に払った注意はよくわかり、『楽園のこちら側』と比較してみればプロットの進展、作中人物の描写など多くの点で作者の工夫の跡が認められることは間違いない。

そこで、最初に『楽園のこちら側』との関連を考えてみると、この二つの作品は、背景として第一次大戦前後の時代の風俗と雰囲気を描く点で共通しているにもかかわらず、内容的には全く異った作品となっている。『楽園のこちら側』は、一人の若者 Amory Blaine の成長の跡を辿る教養小説 (*Bildungsroman*) であり、Amory が大戦前後の混沌とした時代を背景に、自己と外界との関係に目ざめ、自己確認していく姿が鮮やかに描かれている。彼は周囲の世界が混沌状態にあると考え本能的に秩序あるものを作り出そうとし、とにかく「何か明確なもの」 (“something definite”)²⁾ を求めようとする。そして「